

「あかんのちやうん」が社会を動かす

それぞれの 人権 新時代

トランスジェンダーの高校教員

土肥いつきさん (61)

4月に企画したトランスジェンダー生徒交流会で、小学6年の児童が打ち明けた。「学校で名前ではなく(女性的な)呼び名で呼んでほしい」。体は男性で、自認する性は女性のトランスジェンダーの子。担任の先生も来ていた。

「まず先生が呼び始めたらいいと思う」「理由の説明は必要ありません」。先輩の中高生たちは言った。

「私も同じ考えでした。誰も、自分の性自認の理由を伝えて人に説明せんでしょう?」。悩み、もがいて生きる力を得る。「一緒にそれをや

る人がおることが大事なんやろな」。交流会は2006年に始めた。年4回、大阪市で開き、主に関西から5〜18歳の数十人が集まる。料理を作り、近況を語り合っている。1985年から一貫して京



性21卒。同志社大卒業。性多様性教育などを研究し、19年に大阪府立大大学院(当時)博士課程修了。京都市在住。

都府城陽市の府立城陽高で数い悩んだ。「その気持ちを説学教員を務める。自身も、トランスジェンダー女性だ。し、知ることも避けていた」。子どもの頃、性的少数者について世間の理解は進んでいなかった。男性であることに違和感を持ったが、1人で思

この経験が、交流会を開く理由の一つかもしれない。97年、ゲイの友人がくれた同性愛に関する本で、トランスジェンダーを知るようになった。2004年に戸籍名を「謙一郎」から「いつき」に変更。女性ホルモン投与を受け、09年から女性用トイレと更衣室を使う。10年には性別適合手術を受けた。妻と2人の子との関係に葛藤しつつ、心と体に向き合ってきた。

「絶対ひっくり返らない」オセロの隅のような仲間を見つけていく。その結果できた社会規範は簡単には揺るがな

い。いわゆる『当たり前』を変えらるんです」

「トランスジェンダーの生

きづらさを訴えて、『この社会はシスジェンダー(性別違和のない人)向けにできていない』と多数派に気付いてもら

「感覚で言うと『変わった』というより『変えてきた』。声を上げて実現する子が出てくると、穴があき始めるんです。壁は分厚いですけどね」

(野津原広中)

スジェンダーを知る。「自分

「これだ」と直感した。35歳

髪を伸ばし、女性的な服を着た。2004年に戸籍名を「謙一郎」から「いつき」に変更。女性ホルモン投与を受け、09年から女性用トイレと更衣室を使う。10年には性別適合手術を受けた。妻と2人の子との関係に葛藤しつつ、心と体に向き合ってきた。

「絶対ひっくり返らない」オセロの隅のような仲間を見つけていく。その結果できた社会規範は簡単には揺るがな

「感覚で言うと『変わった』というより『変えてきた』。声を上げて実現する子が出てくると、穴があき始めるんです。壁は分厚いですけどね」

(野津原広中)